翻訳とは ②

天理教海外部翻訳課
成田　道広　*Michihiro Narita*

可能性の基層

言語を用いる主体的な存在が人間である以上、すべての人間に共通する要素を見出すことは、翻訳の可能性を考察するうえで有用である。どの人間であっても、経験やそれに基づく意識には類似性が見られる。この類似性に関して成瀬は、「生きるための条件としての類似性」、「知覚器官の共通性」、「感覚的な刺激にたいする生理的な反応の類似性」、「基本的な心理的欲求の類似性」、「国際的な文物・思想・人事の交流」などを推定している（成瀬 1989:30-31）。人種や国境を越えて我々が共感や同情といった感情移入による相互理解を可能にする性質も、人間が自身の認識を言語化する形式の類似性を導き出す。なぜならば言語は人間の認識と精神の構造を反映するからである。チョムスキーは、「言語の普遍質の経験論的研究は、人間言語の可能な多様性に関して、高度に制限的な、わたくしの信ずるところでは全く真実らしい仮説の定式化へと導いた。それらの仮説は、内具的な精神活動に当然の場所を与えるところの知識獲得の理論を展開する試みに寄与するものである。したがって、言語の研究は一般心理学において一つの中心的場所を占めるべきである」（チョムスキー 1980:151）とし、人間の言語と精神の関係性に注目している。

彼は、幼児の言語獲得を例に、人類が普遍文法を生得的に備えていると仮定し、表層文法と深層文法の差異を明確にしつつ、言語と人間の精神的表示の普遍的な関係性に着目した。世界の諸言語は表層構造においては多様であるが、深層構造では普遍的な共通の特徴を有し、特定の社会において、時間的空間的制約の中で共有されているそれぞれの言語は、生得的な言語運用能力の普遍性に基盤を持っていると指摘した。

「特に言語の場合には、精神の生得的諸特質と言語構造の諸特性のあいだに密接な関係を予測することは自然である。言語は結局のところ、その精神的表示と別箇には存在しないからである。言語がどのような特質をもつにせよ、それらは言語を発明した、そして各々の継起する世代によって新たに言語を発明する、有機体の生得的な精神過程によって、言語の使用の諸条件と連合するあらゆる特質といっしょに、言語に与えられる特質でなければならないからである。」（チョムスキー 1980:146）

このように、言語は人間の精神過程の組織内を探索する消息子のようなものであり、すべての人が有する生得的な言語能力がベースとなり、所属する社会の言語との接触によって、その能力が開発されると彼は考えた。

いかなる思惟や思想も言語なしには存在し得ない。人間の言語能力に関する深層構造の類似性と普遍的な側面からは、言語間翻訳によっても意思伝達が可能であるという事実が浮かび上がるであろう。

さらに、成瀬は次のように言語による伝達手段の類似性についても合わせて指摘している。

1. どの言語にも経験及び意識内容に対応する語が存在する。
2. 一つの言語の学習の可能性を支える能力は他言語の学習にも適用できる。
3. 言語表現に用いられる文の基本的な構造には類似性がある。（成瀬 1989:32）

これらの類似性によって、我々は二言語或いは多言を併用することが可能となる。同時に、その類似性を基盤とし、二言語あるいは多言語併用者によって異なる言語間の翻訳も可能となる。このような類似性は、特別な訓練なしに自然に修得しうる自然言語が有する合理的側面に由来しているといえよう。

しかしながら、翻訳に関する否定的な見解は根強い。「翻訳者は裏切り者」（It.Traduttore, traditore;）と、イタリア語でいわれてきたように、歴史的にも翻訳者はあまり好意的には受け入れられなかったようである。

以前ある同時通訳をしていた時、話者が語呂合わせを連発し、通訳不能となったことがあった。その時、私はイヤホンを付けた聴衆に「笑ってください」とだけ伝えることにした。通訳を終えると、話者が「今日の通訳は非常に良かった。通訳を介して聴衆にこれほどうけたのは初めてだ。」と通訳内容を絶賛したのである。それを聞き、私は苦笑いしつつ、自身が「裏切り者」であると実感した。

二言語間を行き来する翻訳者は、つまるところどちらかの言語に偏ることもなく、どちらかを見捨てるわけでもない。結局、中間的な存在として両方の期待を裏切ることになりかねない。さらに、そもそも原文に忠実な翻訳は可能なのかどうかといった根源的な問いが常に付きまとう。その上に掲げられたのが上述の格言であるといえよう。国際的な文化交流が少なかった時代においては、国を裏切って逃亡した者や異国からの捕虜が二言語併用者であったという歴史的事実も反映しているかもしれないが、いずれにしてもこの格言は翻訳者にとっては非常に重く、ある種の自戒の念を覚える。

では翻訳の限界は具体的にどのような要素に起因しているのだろうか。翻訳によって具体的に変容してしまう要素とは、原文の音、語数、文法上の性概念、語順や多義語などである。それぞれの言語には独自の発音形式があり、たとえ外来語であっても正書法の違いから元の単語とは音素が異なる。語数も原文と一致することはほとんどなく、語順も変わってしまうことが多い。特定の性に基づく文法的な性概念の転移はほとんどの場合不可能である。さらには、対句や比喩表現、語呂合わせなども訳出不可能な要素を多分に有する。多義語を翻訳する場合は語義の取捨選択という問題がある。このような限界は、特に文学作品の翻訳の場合、埋めがたい隔たりを生み出してしまう。

理論的には、上述の様々な形式的要素に見る翻訳の限界性は否定しがたい。しかし、それはあくまで理論であって、現実的には翻訳者はその限界を克服しようと努力する。そして、自身の技術の高みを目指す。翻訳者自身の技術には限界はない。つまり、翻訳の限界性を見据えたうえで、その埋めがたい隔たりを自身の翻訳技術によって克服しようと努める。翻訳にまつわる諸問題を、人間相互のコミュニケーションの問題として考えてみると、同一言語であっても、コミュニケーションがうまくいく場合とそうでない場合がある。同じ言語を用いていても誤解が生まれるのは日常茶飯事である。その誤解を修正する手立てこそが実は重要であり、翻訳においても、どのような誤解が起きうるのか、そしていかに誤解を修正するかという点に留意すれば、翻訳による致命的な誤解は防げるであろう。そのような洞察力と創造性に富む翻訳を可能にするためには、言語知のみならず、関連する事柄や目標言語圏の文化的な知識、つまり世界知も必要となることは言うまでもない。裏切り者である以上、誠実かつ創造的な裏切り者でありたい。

［引用文献］
ノーアム・チョムスキー（川本茂雄訳）『言語と精神』河出書房新社、1980 年。
成瀬武史『翻訳の諸相』開文社出版、1989 年。